

令和 3 年 8 月 20 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02820

研究課題名(和文) 現在時制の小説における話法

研究課題名(英文) Discourse presentation in present-tense narratives

研究代表者

池尾 玲子 (Ikeo, Reiko)

専修大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：20216485

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近年増加傾向にある現在時制で書かれた英語小説の語りを、従来の過去時制による語りとの差異が顕著に現れる話法に着目して、その文体的特徴を解明した。小説の話法を分析する手段として、2つのコーパスを作成した。1つは過去時制のテキストから成り、もう一方のコーパスは2000年以降に出版された現在時制の小説のテキストから成る。この2つのコーパスに品詞とともに話法のカテゴリーをタグ付けし、直接話法、間接話法、自由間接話法などが2つのコーパスでどのように使われているかを数量的・質的両面から比較検証した。現在時制の小説では、語り手の物語を推進する働きが抑制され、登場人物の視点がより強調されることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語小説において、語りに現在時制が広く用いられるようになったのは、21世紀に入ってからであり、本研究はその包括的なデータが入手可能になってから世界的にも最も早くその文体研究に着手したものである。現在時制小説を数量的に分析するだけでなく、文体論、特に話法の視点から過去時制小説と比較した本研究は、現代の現在時制小説の物語論、文体論、話法の研究の先駆けとして、今後の発展に大いに貢献するものである。

研究成果の概要(英文)：The use of the present tense for narrative fiction has been more common in the 21st century. This research investigates how characters' speech and thoughts are presented in present-tense narrative, comparing the usage with that found within past-tense fiction in the 20th century. The data of this research consists of two corpora: a corpus of present-tense narratives and a corpus of past-tense narratives. Both the corpora were annotated using two annotation systems: a part-of-speech tagging device and an XML-conformant mark-up system, categorizing speech, writing and thought presentation. The texts of present-tense fiction were analysed quantitatively and qualitatively by comparing these two corpora. Present-tense narrative and past-tense narrative share a similar amount of speech presentation while present-tense narrative tends to have less narration and a larger amount of characters' thought presentation.

研究分野：文体論

キーワード：英語学 文体論 話法 語りの時制 21世紀現在時制小説 20世紀過去時制小説 直接話法 間接話法

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現在時制で書かれた英語小説は、近年増加傾向にあり、2000年以降の英国マンブッカー賞の最終選考に残る6作品においても、毎年約3分の1の作品は現在時制で書かれている。現在時制を用いて小説を書くことは、文体技法の選択肢として広く浸透しているにも関わらず、その文体はあまり研究されていなかった。そこで本研究は、従来の過去時制による語りとの差異が顕著に現れる話法に着目して、その文体的特徴を解明することを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、現在時制語りの話法の質的（文体論・語用論的考察）・量的（新しいコーパスの構築）分析を、これまでの過去時制語りの話法研究と比較しながら行うことで、現在時制語りの小説が生み出す革新性の一端を明らかにする。話法（直接話法・間接話法・自由間接話法等）は、語り手が物語内容の核心をなす登場人物の会話や思考を読者に提示する方法である。つまり、語り手による話法の選択は、読者の物語解釈に大きな影響を与えることになる。

3. 研究の方法

(1) データ

新小説における話法を分析する手段として、2つのコーパスを作成した。1つは既存のランカスター大学による話法のコーパスから20世紀の小説の部分を選抜し、一部を改変したものであるが、これは過去時制のテキストから成っている。もう一方のコーパスは2000年以降に出版された現在時制で書かれた小説のテキストから成るコーパスである。現在時制小説のコーパス、過去時制小説のコーパス共に純文学と大衆小説の2セクションを擁し、それぞれのセクションで、1人称と3人称の語りでほぼ同数のタイトルとなるようにデータを構成した。1つの作品から約2000語のテキストを選抜し、各セクション20タイトル、1つのコーパスに40タイトルのテキストを収録した。この結果両コーパスはそれぞれ約8万語を擁する。この2つのコーパスに品詞のタグだけでなく、Semino and Short(2004)によって提案された話法のカテゴリーのタグを付した。品詞のタグ付けについては、オンラインのコーパス構築システム Sketch Engine (Kilgarriff et al. 2014) を使い、話法のタグ付けは XML 方式で手動ですべてを行った。後者の手続きには2年を要した。各コーパスが収容するデータはいずれも20世紀以降の著作物であり、著作権の関係から一般公開はせず、本研究のみに使用する。

(2) 分析方法

現在時制小説と過去時制小説のコーパスについて数量的、質的な分析を次のように行った。まず数量的な分析においては品詞と話法のタグそれぞれにおいて、頻度、語数、セン

テンスの長さ等を2つのコーパスで比較し、現在時制小説の特徴的な語彙、文法構造などを明らかにした。また話法のタグによる分析は話法の各話法のカテゴリーごとにタグ数の比較を行った。

質的な分析についてはコーパスによるコンコーダスラインの分析とともに、物語論、文体論の知見を基に、過去時制、現在時制の小説における語り、および登場人物の談話の特徴を様々な角度から検証した。

4. 研究成果

(1) 現在時制小説の文体の全体的な傾向

現在時制小説と過去時制小説のコーパスを数量的に分析した結果、現在時制小説の全体的な特徴として、(1) 動詞と代名詞の多用、(2) 固有名詞と形容詞については過去時制小説に比して頻度が少ない、(3) 現在進行形が多くみられる、という結果が得られた。これらの特徴はいずれも、Leech et al. (2010) が提唱する、(書き言葉と比較した) 口語に見られる特色と一致し、現在時制小説がより口語に近づいていることを示唆するものといえる。また現在進行形については語りの中に使われるものと、登場人物の談話の中に使われるものとをそれぞれ質的に分析した。語りに進行形がしばしば使われることは、語り手の視点が過去時制小説に比して、狭められていることを示唆し、過去時制小説における語り手の万能性と比べると、より登場人物の視点に近くなっていることの言語的証左であるといえる。また登場人物の談話中に多く現在進行形が用いられることは、登場人物の関心が現在に集中していることを示すものである。また、現在進行形の口語に見られる比較的新しい用法(近未来の予定、評価)なども含まれ、登場人物の使う言葉が現実社会の話し言葉に近づいていることもわかる。

(2) 現在時制小説における話法

小説中の語りと登場人物の談話については、数量的な分析は完了したものの、質的な分析は、現在もまだ進行中である。会話、思考、テキスト化された発話のうち、会話の分析がようやく終了したところである。以下現在までの分析結果を報告する。

まず語り手の語り、登場人物の会話、思考、テキスト化された発話それぞれにおいて分量を過去時制小説と比較すると、登場人物の会話の描出については現在時制におけるその分量はほぼ同量である。小説全体の50%弱が登場人物の会話(直接話法、間接話法、自由間接話法、その他)で成立している。物語の展開において登場人物の会話、特に直接話法で描かれる「セリフ」は最も重要な要素であり、現代小説の根幹をなすものとして、その割合は物語の時制にかかわらず小説全体の3割弱であることがわかる。

過去時制小説と比べた現在時制小説の大きな特徴として、語りの分量が10%ほど少なく、登場人物の思考を描く分量が10%ほど多いことが挙げられる。語り手の視点が制約されている一方、従来の過去時制小説で語り手が担っていた、背景説明や解釈などの役割

が、登場人物の思考によって代替されている場合が多くみられる。これにより、物語の展開において、語り手の視点、役割の比重が軽くなり、登場人物の思考が大きく関与することとなっている。

登場人物の会話描写においては、過去時制小説、現在時制小説ともに、直接話法が小説全体の 30% 近く用いられ、間接話法はわずかに 6% ほどである。直接話法で語られる、登場人物の会話の内容についても、key part-of-speech, keyword, key n-gram の手法を用いて、分析した。直接話法は話し手の視点から動詞の時制、代名詞などが使用されるため、語りの時制の制約は受けないにもかかわらず、現在時制小説においては、登場人物は現在時制を用いる場合が多いことがわかった。また現在時制小説の登場人物は time, yes, tell, just などの語を発話中に多用する傾向も見られた。これを基にそれぞれの場面でこれらの語がどのように使用されているかを検証すると、(1) 登場人物が会話の際にお互いに質疑応答することが多く、(2) 登場人物同士の間関係が I and you に限定されがちであること、(3) just などの discourse marker がより多く見られる、ということが導き出された。

間接話法については、現在時制小説、特に 1 人称語りの小説において、過去時制小説よりもわずかながら多く使用されることがわかった。これは 3 人称語りよりもさらに視点に制限がかかる 1 人称語りにおいて、現在に置いている軸足を過去に移動させることなく、過去における他人の発話を描出することが可能な方法であるからと推測される。

<引用文献>

- Kilgarriff, A., Baisa, V., Bušta, J., Jakubíček, M., Kovář, V., Michelfeit, J., Rychlý, P., Suhomel, V. (2014) The Sketch Engine: ten years on. *Lexicography*, 1(1), 7-36.
- Leech, G. N., Hundt, M., Mair, C., & Smith, N. I. (2010) *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. London: Cambridge Univ. Press.
- Semino, E., & Short, M. (2004) *Corpus Stylistics: Speech, Writing and Thought Presentation in a Corpus of English Writing*. London: Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Ikeo Reiko	4. 巻 28
2. 論文標題 'Colloquialization' in fiction: A corpus-driven analysis of present-tense fiction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Language and Literature: International Journal of Stylistics	6. 最初と最後の頁 280~304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0963947019868894	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Nakao Masayuki	4. 巻 -
2. 論文標題 Memory, Narrative, and Authenticity in Kazuo Ishiguro's A Pale View of Hills	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Online Proceedings of the Annual Conference of the Poetics and Linguistics Association	6. 最初と最後の頁 1~14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Shigematsu Eri	4. 巻 -
2. 論文標題 Expressing character's point of view in the present-tense narrative: The case of Ali Smith's How to Be Both	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Online Proceedings of the Annual Conference of the Poetics and Linguistics Association	6. 最初と最後の頁 1~15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Reiko Ikeo	4. 巻 -
2. 論文標題 'Colloquialization' in fiction: a corpus-driven analysis of present-tense fiction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Language and Literature	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eri Shigematsu	4. 巻 27 (2)
2. 論文標題 Defoe's Psychological Realism: The Effect of Directness in Indirect Consciousness Representation Categories	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Language and Literature	6. 最初と最後の頁 71, 85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0963947018782008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Reiko Ikeo	4. 巻 52.3
2. 論文標題 Unshared presuppositions and assumptions in Flannery O'Connor's Wise Blood	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Style	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eri Shigematsu	4. 巻 なし
2. 論文標題 Interdisciplinary approach to remembering modes: The case of Defoe's fictional autobiographies	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Online Proceedings of the Annual Conference of the Poetics and Linguistics Association (PALA)	6. 最初と最後の頁 1,11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Eri Shigematsu	4. 巻 34
2. 論文標題 The language of experience: representations of perception in the novel	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代英語研究	6. 最初と最後の頁 27, 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計15件(うち招待講演 4件/うち国際学会 11件)

1. 発表者名 Reiko Ikeo, Masayuki Nakao, Eri Shigematsu
2. 発表標題 A corpus stylistic comparison of speech presentation of 21st-century present-tense fiction and 20th-century past-tense fiction
3. 学会等名 the 46th Conference of the Japan Association for English Corpus Studies (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 重松 恵梨
2. 発表標題 現在時制と小説 : 過去時制語りから現在時制語りへ
3. 学会等名 近代英語協会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ikeo Reiko
2. 発表標題 Speech, thought and writing presentation in present-tense fiction
3. 学会等名 Osaka Symposium on Corpus Stylistics (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikeo Reiko
2. 発表標題 Pragmatics of present-tense fiction: a corpus stylistic approach
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Ikeo Reiko
2 . 発表標題 Quiet narrators and pondering characters in present-tense fiction
3 . 学会等名 International Corpus Linguistics Conference 2019 (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Nakao Masayuki
2 . 発表標題 Memory, Narrative, and Authenticity in Kazuo Ishiguro ' s A Pale View of Hills
3 . 学会等名 PALA Conference 2019 (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Shigematsu Eri
2 . 発表標題 Expressing character ' s point of view in the present-tense narrative: The case of Ali Smith ' s How to Be Both
3 . 学会等名 PALA Conference 2019 (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Reiko Ikeo
2 . 発表標題 The use of the progressive aspect in present-tense narrative
3 . 学会等名 PALA Conference 2018 (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Reiko Ikeo
2. 発表標題 A corpus-driven analysis of present-tense fiction
3. 学会等名 The 4th Asia Pacific Corpus Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Reiko Ikeo
2. 発表標題 A corpus-based approach to present-tense fiction
3. 学会等名 JACET Discourse-Pragmatics SIG (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Reiko Ikeo
2. 発表標題 Speech, thought and writing presentation in present-tense fiction
3. 学会等名 Osaka Symposium on Corpus Stylistics (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Reiko Ikeo
2. 発表標題 Discourse presentation in present-tense narrative: speech and thought presentation in Hilary Mantel 's Bring Up the Bodies
3. 学会等名 The 15th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Reiko Ikeo
2. 発表標題 The use of 'will' in present tense Narrative
3. 学会等名 The 9th International Corpus Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Reiko Ikeo
2. 発表標題 Colloquialization' in fiction: a corpus-driven analysis of present-tense fiction
3. 学会等名 Research group at Huddersfield University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Eri Shigematsu
2. 発表標題 Interdisciplinary approach to remembering modes: The case of Defoe's fictional autobiographies
3. 学会等名 The 37th Annual Conference of the Poetics And Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	中尾 雅之 (Nakao Masayuki) (00733403)	鳥取大学・地域学部・准教授 (15101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	重松 恵梨 (Shigematsu Eri) (80884113)	広島大学・人間社会科学研究科(文)・助教 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関